

久留米の自然



2006年1月1日

第91号

撮影場所

久留米市御井町

撮影時期

昭和30年(1955年)

市政久留米より(引用)

櫨の木と土塀小屋

山口 淳

上の写真は、「市政くるめ」の昭和30年正月号の冒頭を飾った写真です。遠くにかすむのは高良山。ですから、撮影場所は現在の久留米大学御井キャンパスから南に、国分の方へよった所です。メインと成る対象は、中央の小屋と、その左右、近景として上のほうに枝が写るハゼの木です。小屋の屋根は、そのとんがった形からわらびきです。壁は、当然土を積み上げたままの土塀です。そう、私達が「ドベゴヤ」と呼んでいた小屋そのものです。朝の逆光の中に映し出された、畑と「ドベゴヤ」、そして道端のハゼの木という、私達の記憶に鮮明に残る、筑後の農村風景です。

今の私達にとって、ハゼといえば秋の紅葉です。暖冬のせいで、ハゼ祭りの頃はまだ青い葉が多い柳坂のハゼ並木が季節を写す風物としてマスコミにもよく登場します。しかし、どうも私の子どもの頃のハゼの記憶は、ハゼ負けと冬のハゼの実ちぎりでした。

ご承知のように、筑後のハゼは江戸時代享保年間の頃から栽培が始まり、幕末には国産品として盛んに藩外に輸出され、久留米藩の財政を潤しています。近代になっても農家の貴重は現金収入源でした。昭和4年刊行の久留米市誌にも工芸作物の欄に菜種・蘭とともに櫨が上がっています。また、明治時代のお雇い外国人で、東京の大森貝塚を発掘したモースは(残念ながら東北の例ですが)著書「日本その日その日」の中で「ぬるでの一種の種子から……この蠟で日本人は蠟燭を作り、また弾薬筒製造のため、米国へ何噸と輸出する。……その(弾薬筒)全部に日本産の植物蠟を塗る……」と記しています。

長く筑後の重要な産物だったハゼも、今は「観光資源」として、地域に貢献しているのでしょうか。もちろん、現在も冬場になればちゃんとハゼの実ちぎりが行われているのですが。

久留米市の蝶 32

アサギマダラ

国分 謙一

高良山から自然歩道や林道に沿って行くと、樹林の広い空間に、フワフワと水色模様の大きな蝶が飛んでいることがあります。独特な色彩で遠くから見ても非常に綺麗な蝶なので、自然観察会等の時などで見かけたら歓声があがりますし、山道で見知らぬ人が綺麗な蝶がいましたと知らせてくれたりします。

日本全土に生息していますが北に行くほど少なくなり、北海道では稀となります。九州以北に生息するたった一つのマダラチョウ科の仲間です。

羽は水色の半透明の膜があり、それが模様となっていて、独特の色彩・斑紋なので日本の蝶の中で間違えることはありません。また雄、雌の区別は簡単で、雄には後羽に黒色の性斑があります。なお蝶を捕らえると良い香りではありませんが臭いが漂います。

移動している

古くから不思議な蝶だと思われてきました。平地、低山地では初夏と秋に、高地では盛夏に多く見られ、沖縄では秋から冬を過ぎ初夏までで夏には見られない等、このような現象は人工的に蝶を育てて見ると合点がいかないし、食草もないような場所でも見かけると。

そこで移動しているのではと近年調査されるようになりましたが、結果は驚くべき事に、春は台湾から日本に(3例)、秋には日本から台湾へ(2例)移動している事が判りました。先月送られてきた資料を見ますと、2003年になされた標識調査数は77、710頭で北海道から台湾まで各地で行われていました。標識数が多いのは鹿児島1万以上、滋賀県9千以上と続きますが、福岡県は少なく2頭となっていました。そして標識された蝶を発見したとの連絡が452件もあったそうです。その内の1件が台湾からの3例目となるもので大分県別府市の鶴見岳山頂で標識されて57日目となる移動と確認されました。

移動前査に参加されませんか!

貴方も移動調査に参加されませんか、方法は簡単で道具は3点、捕らえるアミ、白いタオル、細字の油性ペンがあればできます。

アサギマダラがフワフワと飛んでいたら、白いタオルを頭上でヘリコプターの羽のように回転させると、スーツとすぐ側まで近づいて来るので、アミで捕らえて羽に油性ペンで記号を書いて放せば良いのです、後は雄雌の区別、放した場所、書いた記号と日時を報告するだけで終わりです。

なお、記号が書かれていた場合は、なるべくなら写真に撮って追加記号を記入して再度放して下さい。貴方が放った蝶が遠く離れた場所で見つかるかも知れません。

久留米市での観察

久留米市では多くありません。5月上旬から10月まで見られますが、平地で見るとは少なく、高良山等の山地で条件が良くても一度に見かけるのは数頭です。各種の草花に來ていますが、特に小さな白い花が好きなのようでよく見ることが出来ます。なお樹木で大きな長いトンネルようになった、やや薄暗い場所ではフワフワと飛んでいるのを比較的に見ることが出来ますので、その時は一度でも良いから白いタオル等で実験して下さい。接近する効果に驚かれることでしょう。

なお、捕らえ損ない蝶が驚くと、急速に上昇し空高くまで飛んでいきます、フワフワと飛んでいたのが嘘のような早さです。



シジミ 蜆貝について

古賀 幸雄

私の蜆川

平成16年に刊行した『大阪勤番中公私日記』に久留米藩の御蔵米を入れる倉庫が「蜆川御手蔵」の名で出る。堂島川の支流であり、近松の「曽根崎心中」の舞台として知られた川であったが、明治末の大火で焼け落ちた瓦礫で埋まって今は見られない。かつて遊郭が多かったこの一帯は、今は高級社用族の集まる地に変わったという。

この小さな川の名は蜆貝がたくさんいたことに由来すると思われるが、私の住む市内国分町の蜆川もいまは暗渠排水路と化し、少年時代、清らかな砂交じりの小川で蜆を取った思い出も遠くなった。

昭和47頃に絶滅した国分の寿泉苔(川苔)栽培地辺りの自然湧水を源とするこの小川は、周辺の水田を灌漑しながら諏訪野町の足形池に流入した。この池でもカラス貝と蜆貝が取れた。この溜池は近くの堂女木池に続くが、昭和3年の久留米・吉井間の久大線開通で断ち切れ、まったく別個に見える。

例の小川でも蜆が多かったのは、国道3号線野田バイパスがいまこの水路を横切る地点から東約100mほどの所だった。傍らに「一本樫」とよばれる巨木があった。久留米藩が樫植え立ての奨励を始めた頃の遺物と思われたが20年前に惜しくも伐り倒された。

少年期の私が初めてこの場で多量の蜆を取った時は、喜びと驚きの気持ちであった。こんな近くの小川にと不思議の感すらした。しかし今思えば下流部の足形池にもいたことを考えると、古くからの自然発生的存在であったろう。

最近、私の友人から聞いた話では、彼の父上が少年期(明20年代末)鵜を用いて高良川で鮎を取る人がいたのを見られたという。鮎と言えば今の池町川にも江戸末期には見られている。天保3年(1832)江戸から藩主に随行して来た礼法指南役の松岡辰方は、

庄島町に築造された家老有馬織部の別荘(今の月星化成の敷地)の泉水は池町川から引水され、清らかな池水に多くの鮎がいると記している。

筑後川下流部の蜆一田の肥料に蜆を

筑後川を国境とする佐賀と久留米両藩の下流部漁民は、文化3年(1820)漁業協定を結ぶ迄は絶えず争いを繰り返した。特に有名なのは、文化8年(1811)以降の現大川市・城島町分の12か村と現千代田・諸富・川副3町分17か村とが関係する事件であった。みな筑後川下流域から立花領有明海沿岸を巡る漁業権争いで、久留米藩側漁民が立花家入部以前、つまり田中氏筑後領有時代の慣行を主張する点は注目される。

紛争は文化12年、柳川領中江で筑後領青木村・青木島村漁民と肥前搦津村ほか3か村民の激突がエツ漁を機としては発生した。久留米側で5人が死亡。事件は両藩交渉では落着せず、江戸幕府への両藩公訴となる。久留米藩側は訴訟人・村役人・見聞人合計約20人が江戸へ出頭する。幕府から現場検証役人が下るが、結局は日田代官(塩谷)に委任され、柳川藩が和談勧告して漁区・出漁船数などの合議がなされた。

この間、公儀役人から従来の両藩漁民の出漁事情の聴取がなされるが、久留米藩側で強調したのは、筑後川内川筋から柳川藩の紅粉屋新田辺までの蜆貝採取(但、紅粉屋辺は3月~9月の間)がある。これについて藩側では、蜆漁の利は漁稼の者だけでなく、三潯郡内100か村にも及び、蜆貝は田地にとって第一の肥料となっている。もし不足すれば藩への年貢上納も格別に減少し、誠に重大な結果となると述べられている。

この事情から漁業協定では久留米藩側に与えられた入漁札120枚の内蜆貝船札(12か村分)は68枚とされた。採草地(緑肥)の少ない三潯郡では堀から揚げる泥土と蜆貝は田の養いには何よりのものであった。

九州「川」ワークショップ in 遠賀川にて 当会「34年、活動ロング大賞」受賞

橋田 沙弓

数年前「川の日」ワークショップについては全国大会で筑後川河川事務所の田中秀子技官が一位に入賞し、ヨーロッパの河川巡りをされたということ、筑後川水問題研究会の例会で報告されたときのことを、記憶している程度でした。

ところが、第1回福岡県「川」ワークショップに3月に参加し、次に7月に第8回「川の日」ワークショップ in 矢作川に参加、10月には第5回九州「川」のワークショップ in 遠賀川に参加しました。1回目のテーマは「環境教育読本ひとつの川から見えるもの」でした。

2回目のテーマは「筑後川中流域の水生生物調査21年間」でした。このときは筑後川流域から7の団体が出場し、みんなに愛される“いい川”“いい川づくり”公開選考会で7団体に「入賞 特別賞豊かな流域の底力賞 筑後川流域殿」と「川の日」ワークショップ実行委員会 より頂きました。

3回目のテーマは「久留米の自然を守る会の活動と未来」でした。このときは筑後川流域から4団体に参加し、当会は次のような賞を、「34年、活動ロング大賞 久留米の自然を守る会殿 あなたは第5回九州「川」のワークショップ in 遠賀川において 私たちに「元気」と「希望」と「知恵」を与えてくれました。よってここに感謝の意を表して表彰します」と第5回九州「川」のワークショップ大会会長より頂きました。副賞として、お結び米 福岡県犬鳴川水系平均標高400m やまつき米1kgを頂きました。

この会に参加して感じたことは各団体が活気にあふれ、生き生きと自分達の団体の活動をいかにPRし、いかにみんなに伝えるかここを砕いていました。そのところが私達に感動として伝わってきます。2006年度は当会もチームワークで頑張りたいと思います。

生き物に魅せられて その31

タシギの巻き 松永紀代子

野鳥の会のYご夫婦から、スコープをお借りした。2005年1月のことだ。前年の11月に地元で「自然を楽しむ会」を立ち上げたが、最初に入会して下さったお二人、「今後観察会をするにも、スコープの扱いに慣れていたほうがいい」との心遣いだ。

早速宝満川に出かけて野鳥を観察。双眼鏡でタシギを確認、スコープに挑戦。ウーンなかなか難しい。これがオオジュリンだったらとても間に合わない。が、有難いことに相手はタシギ。やれやれやっと入った。えっ？目を見開いた。きれい！これ、本当にタシギ？何度も図鑑で確認した。

そんな時、突然タヒバリがスコープに入ってきた。タシギがパッと尾を広げた。オレンジが目にはやきついた。タヒバリは即退散。へー、あの尾にはこんなしかけがあったんだ。スコープのおかげでまた一つ発見をした。

ひととき 動物笑い話 その36

アルマジロの受難

アルマジロが集落付近の空き地に迷い出てしまった。遊んでいた子供達が寄って来たので「やばい」と思って体を球形にしたのが不幸だった。「これでサッカーしようぜ」と言って蹴りだした。しかし、さすがに硬い甲のためにほどなくあきらめ、ボーリングをやり出した。とうとう、アルマジロは目が回って体を伸ばしたところ、「これじゃつまらない。もう止めようぜ」と言って、子供達は立ち去った。「ヒトとして有るまじろ(き)行為だ」とアルマジロはぶんぶん怒った。

*貧歯目のアルマジロ科に属し、背が硬い甲で覆われる。南北アメリカに約20種分布し、体長が12~100cmで、主食は昆虫やミミズ等である。危険時にはダンゴムシの様に体を球状に丸める。有鱗目に属し、東南・南アジアやアフリカに分布し、シロアリを主食とするセンザンコウも球状になる。(Y.Y)

例会報告

第324回例会 雨の観月会

今村 由子

9月10日(土)の例会は毎年観月の集いとなっている。しかし、去年に引き続き今年も雨で月は見られなかった。残念ではあったが、雨が降ったら降ったなりに楽しみ方があるものだ。望遠鏡をセットして雲間に見え隠れする月を気にすることもなく、友情参加のカサブランカの皆さんと合唱を楽しめ、吉田さんと青少年科学館でボランティアをされている熊谷さん2人の宇宙の話も興味深く、月や星座を巡っての会話も弾んだ。

参加者18名。天候の関係もあって少なかったが、抹茶にお茶菓子、掘りたてのお芋もおいしく、月はなくとも、心和む時であった。

観月会に参加して

諏訪野町 三牧 亮介

初めての参加で今夜を楽しみにしていたら、朝からどんより、午後からポツリポツリ始まる頃には本降りに残念。二年連続の雨だそう。しかし、雨の場合も考えてあったらしく久留米大学学生会館内でのスライドによる星座教室に、カサブランカ合唱団の今夜のムードにピッタリの歌や尺八の音色にいやされました。聞くところによると合唱団の方々はボランティアで色んな施設に行き歌ってあるとの事。そして星座教室の吉田様と女性の熊谷様は星座を見に日本の反対側のオーストラリア迄出掛けられると聞き、古代人が地球からはるか遠い星をながめて色んな想いが星座につながったのかなあーと実感しました。

やはり自分の好きな事をみつけ、それをやり続ける事が生き生きとした人生を送れる秘訣かもしれない。それにしてもこんな素敵な会場をかり、各種の段取りを付け用意し何年も続けられる事に感謝。最後にお抹茶に自然農園でとれたての無農薬イモのおいしかったこと。ごちそうさまでした。しかし、何をす

るにも人のささえがあつての事だなーと思いました。

謝々

観月会に参加して

旭町 古賀 信夫

9月10日に久留米大学で開催された観月会に参加した。当日は生憎の雨で月や星をみることはできなかったが、カサブランカの会の皆さんによる合唱や専門家による星座についての講話を聞いた。

古来、星座や月は私達の生活に密接な係わり合いをもってきた。農作業の目安として、また生活に節目をつける暦としても利用されてきた。それだけに、空を見上げることの少なくなった現代の私達にとっても一種独特な魅力を感じさせるものである。月にはウサギが住んでいるとか、あの星の配列は白鳥に見えるとか、サソリに見えるとかの説明を聞いてもおぼろげながらも理解できるのはそのためであろう。

前述のように今回の観月会は星も月も見えなかったけれども、目を閉じて遠い宇宙の果てまでも思いをめぐらすと同様、星についての講話や、素晴らしい音楽によって、祖先から受け継いだ月や星座の魅力を再認識させるとともに、雲を透過して素晴らしい月や星座たちに出会った観月会となった。



カサブランカ合唱団の皆さん

第325回例会

ネイチャーゲームと自然観察会

10月16日(日)さわやかな秋晴れの1日ネイチャーゲームと自然観察会が行われました。参加者は幼稚園生や小学生を中心に21名でした。参加者はくるめネイチャーゲームの会から配られたカードを手に、高良内幼稚園の裏の道を四季の森に向かってスタートしました。カードには「ちくちくする葉」や「炭焼き釜跡」などこれから出会うはずの色々な目印が書いてあり、子供たちは目印を捜しながら元気一杯で登って行きました。普通は気につかないような足もとの石1個にしても、説明を聞いてみると何億年という時間の流れや、高良山の成り立ちなど、様々なことを教えてくれるということが分かります。「緑色片岩」という用語を覚え「あっ、ここにもあった!」とすっかり緑色片岩のプロになった小学生もいました。また、アサギマダラという蝶は白いものに寄ってくるという説明を聞いた直後に本当にアサギマダラが白いタオルに近づいてきたのは、驚きでした。

頂上の月見山では、ネイチャーゲームを楽しみ帰りは「何かいいにおいのするもの」「何かトゲドゲしたもの」など、それぞれのお土産を捜しながら山を下りました。心地よい足の疲れと共に高良山の自然に対する「へー」「ふーん」といった発見が心に残った一日でした。(Y.M.)

せんせいへ

宮ノ陣保育園年中 こんどうまゆ

どんぐりひろいがおもしろかった。まつぼっくりがでっかかった。いろんないろのはっぱがあった。おとがでるおはなってきれいなおはなだね。からすうりってどうやってうえてそだつの? まゆより



ネイチャーゲーム「ごちそうはどこだ」をやっている子どもたち。保安林「いこいの森」の月見山にて

第326回例会

高良山・四季の森

バードウォッチングウィーク探鳥会

米田 豊

3団体と市農林課との共催で行われ、27名の参加者でした。この場所の活用を紹介するために、今回TNCで日曜朝8時55分から放映している「ふれ愛ふくおか県」のビデオ制作スタッフやレポーターも同行しました。鳥がなかなか姿を見せず困っていましたが、環境保全林でようやくヤマガラが気前良く十分に姿を見せ、参加者もホッとしました。昼食後、ネイチャーゲームの会よりクイズが出され、子供達はきちんと答えていました。帰りにも出された問題(トゲトゲのあるもの、食べ跡のあるものなど)の植物を採集しながら、トゲナナフシを発見したり、魚を観察したりして元の集合場所に戻りました。そこで植物の確認をし、鳥合わせを行い、私が育てた植物やクルマヤギンナンをプレゼントして解散しました。

観察された野鳥はキジバト、コゲラ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、シロハラ、ウグイス、エナガ、ヤマガラ、ジジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カラヒワ、スズメ、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの20種で、番外はガビチョウ。

私の生物暦で知る地球の温暖化

米田 豊

渡り鳥の初認日、野鳥や昆虫の初鳴き日、開花日等を長年記録している。気象庁は10月の世界の平均気温が過去最高となり、日本でも98年に次ぎ気温で、平年より1.43度高いと報告した。これを裏付けるように冬鳥のジョウビタキの飛来が筑後地方で1週間遅れた。10月24日、小郡市赤川の宝満川に掛かる西鉄天神大牟田線鉄橋近くの低水敷に茂る柳林でツクツクホウシの合唱を聞いた。元久留米昆虫研究会会長の行徳直己氏が筑後地方におけるセミの初鳴きの日や終鳴き日を長年記録されており、それによると本種の平均終鳴き日が10月20日で、一番遅かったのは10月29日であった。私は今回初めて終鳴き日の確認にトライし、毎日同地に出かけた。何と立冬(11月7日)を過ぎる11月10日まで鳴いていた。終鳴き日や終認日の記録の難しさと温暖化を実感した次第である。

環境シンポジウム

バイパスに御井町のイチヨウ

を残してください!

橋田 沙弓

久留米市御井町の永福寺境内にある大イチヨウが県道予定地「東合川野伏間線」の都市計画道路のため撤去されることになり、地元住民らでつくる「永福寺のイチヨウを守る会」(大津留敬代表)のメンバーが12月5日市役所と県庁を訪れ、麻生渡知事あての13,366人分の署名を提出しました。イチヨウをそのまま中央分離帯に残すことを求めています。イチヨウは高さ25m、幹回り3.2m、齢70-80年という。近くに住む大津留さんは40年間、朝に夕にイチヨウを眺めてきました。「枝の数が多く、箒木のように上に伸びた姿が美しい。多くの住民が長く親しんだ大切な存在」との思いが10月に同会を立ち上げて、署名を募り、多くの方が賛同し署名が集まりました。同会は12月10日(土)午後1時から久留米大御井学舎のメディアセンターで、「バイパスに御井町のイチヨウを残してください」と題したシンポジウムを開きました。パネラーに今井正雄氏(久留米ゼミナール理事長)、大津留敬氏(福岡県歌人会事務局長)、河内俊英氏(久留米大学助教授 農学博士)、野口喜好氏(樹木医)、橋田沙弓(環境省環境カウンセラーの5人、司会者は福田洋一氏(市民オンブズパーソンくるめ代表)で進められました。

大津留敬代表の経過報告の中で、昨年御井小学校一年の古賀大貴くんが下校中、永福寺の雌のイチヨウの木がきられるのを見て、「おばあちゃんたいへん、いまイチヨウの木がきられるからけいさつをよんで、やめさせて」といったという作文が読まれました。野口樹木医から70年以上たつこの大イチヨウの移植の難しさが詳しく語られました。

この会場にはRKBの取材も入り、参加者は60名でした。その中には久留米大学の学生も多く見られました。参加者の感想が寄せられたので、一部紹介します。

「環境シンポジウムにて」

久留米大法学部一年

私はこのシンポジウムに参加する前までは、イチヨウの木が道路建設の妨げとなっているなら、どこか別の場所に移植するのが良いと考えていました。しかし、樹木医の野口さんの話によると、大木移植の成功の確率は非常に低く、成功したとしても、夏の直射日光や冬の寒風などにより、体力を使い果たして枯れるか、または、枯れないにしても数十年間こんなことを繰り返して生きているだけというような事態になってしまったというのです。

私は今まで移植という方法は自然や樹木を大切に思っているからする処置だと思っていました。しかし、工事関係者達はその『移植』を後ろ盾として工事を推し進めて、移植した後その樹木がどうなろうと問題としていないことが野口さんの話でわかりました。いろいろな提案や質問があったのですが、その中で特にイチヨウを保護するに当たっての重要な質問がありました。それはイチヨウの木をその場所に残せたとしても、環境が変わった中で果たして、今まで通り生きていけるのかという質問でした。確かにその場に残すことができたとしても、道路建設によって環境が変わった中で無事生きていける保障はないのです。

22歳 久留米市在住 匿名希望

移植しても後々樹木が傷んでしまい、最悪枯れてしまうという事は私にとって大変ショックなものでした。しかし、現実に目を向けて見ると私は現在の交通の便を考えると道路の開通には賛成せざるを得ません。やはり不便な思いをしている方もいらっしゃると思いますので開通開発を反対することは出来ません。それでも私のような開発推進派でも銀杏の木を切ってしまうのは心が痛みます。良い方向へ話が進む事を願っております。

《行事案内》

第328 会例会: 総会と講演会

平成18年度の総会の後、講師山口淳氏(文化財保護課)の講演会を行います。

〔日時〕: 1月14日(土) 14:00~17:00

〔会場〕: 久留米市役所3階305号室

〔総会〕: 14:00~14:50

〔講演会〕: 15:00~17:00

〔テーマ〕: 「吉山籐兵衛の旅日記から江戸の旅」

〔参加費〕: 100円(中学生以下無料)

* 新年会を18:00より「食彩館山咲(やまさき)」(30-6515 日吉町28-13)で行います。会費3500円でどなたでも参加できます。

第329 回例会:

久留米市の地域学のために

「久留米っ子高良川小検定」と「わくわく高良川歩き」を講師角正博氏(久留米商業高校教諭)で行います。車で移動します。

〔日時〕: 2月11日(日) 13:00~16:00

〔集合〕: 高良内町西鉄竹の子バス停

〔解散〕: 西鉄久留米駅バスセンター前

〔参加費〕: 100円(中学生以下無料)

小雨決行

〔持ち物・服装〕: 水筒、帽子、防寒用具

第330 回例会: 春の野草を愉しむ会

今年は、筑後川の河川敷で行います。春の野草(薬草)を観察し味わいます。小雨決行

〔日時〕: 3月26日(日) 9:00~14:30

〔集合・解散〕: 筑後川発見館前

〔参加費〕: 大人400円 子ども300円

〔持ち物〕: ごはん、おわん、おはし、水筒

〔共催〕: 筑後川まるごと博物館

* 野草の事前採取を3月25日(土)に行います。オランダガラシ、ツクシ、ユキノシタ、ノビル、アブナラヤツバキの花等採取します。ハゼ並木のところの香月さん宅前に13:00集合、16:00解散。

《事務局だより》

また新しい年が始まった。昨年的一年を表す漢字は「愛」だったが、年末は耐震構造の偽造や、子どもが犠牲になる事件事故が続く、「愛」とは程遠い殺伐とした年の瀬だった。舞台劇で「おぼけちゃん」というのを観た。お化けが住む森がゴミ埋立地になるのを阻止するため、人を脅かすお化け。ところがそれを逆に「お化け見学ツアー」を始め、大儲けする人間。劇の最後はハッピーエンドになった(高良山にもお化けがいて欲しいもの)ものの、人間のしたたかさ・ブームに乗せられる様子は、現実の「小泉劇場」「刺客」などを彷彿とさせた。恐れ敬うべき対象も無くし、尊ぶべき命もないがしろにされる。こんな時代は「想定外」だったと言ってもいいられない。今年こそ「愛」にあふれる年となって欲しい。(金原優子)

ホームページを案内します。

「久留米の自然を守る会」ホームページ

<http://www.geocities.jp/kurumenosizen/>

1. 会費納入について

会費は、会の活動を支える源です。まだ、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。

2. 原稿募集

次号92号は平成18年4月1日発行予定です。原稿の〆切は3月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。

3. 幹事会のご案内

幹事会(定例)は原則として毎月第1水曜日の19:00~21:00まで、西町教育集会所で行います。皆さんも気軽にご参加下さい。(1月11日、2月8日、3月8日、4月5日予定)

久留米の自然

平成18年1月1日 第91号

発行 久留米の自然を守る会

発行者 橋田沙弓

事務局 〒839-0851

久留米市御井町1595-9 金原優子方

TEL・FAX 0942-44-1942

印刷(有)プリンティング コガ

TEL 0944-88-0027 FAX 0944-88-0029